奈良・平城京跡(2)

1　所在地　一　奈良市青野町、二　奈良市宝来町

2　調査期間　一　一九九七年（平9）九月～一二月、二　一九九七年九月～一一月

3　発掘機関　奈良市教育委員会・奈良市埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　一　立石堅志・原田香織　二　三好美穂・大窪淳司

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　一　奈良時代～室町時代、二　縄文時代、弥生時代、奈良時代

（奈　良）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

一　右京二条三坊七坪（第三七八―四次調査）

本調査は、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴うもので、調査地は平城京右京二条三坊七坪の西辺部中央付近に位置し、発掘面積は九〇〇㎡である。

検出した奈良時代から平安時代の遺構には、西三坊坊間路、同東側溝、西三坊坊間路に面し坪内を南北二分する位置にある西向きの門、掘立柱建物二棟、掘立柱塀一条、井戸二基がある。この他に西三坊坊間路西側溝の位置を踏襲する中世の流路がある。

木簡は、井戸SE五一六から一点出土した。この井戸の掘形は、平面隅丸方形で、東西三・三m、南北三・二m、検出面からの深さ一・六mである。枠の構造は方形縦板組横桟留めで、内法は〇・九m×〇・九mである。枠内の埋土から木簡とともに奈良時代後半から長岡京期の土器が、掘形の埋土から奈良時代後半の土器が出土した。その他の遺物には、西三坊坊間路東側溝から出土した和同開珎、横櫛、三彩小壺蓋、三彩杯か皿の破片、緑釉椀、円面硯がある。また、これまでのところ墨書土器四点、箆記号のある土器一点を確認している。このうち文字の判読できるものには、須恵器杯底部内面に書かれた「□考所」、須恵器杯蓋頂部外面に書かれた「大」、須恵器甕口縁部外面に線刻された「十」がある。

二　右京三条四坊十坪（第三八六次調査）

本調査は、大和中央道街路整備事業に伴う事前調査である。当該地は、平城京の条坊では右京三条四坊十坪の西半部に相当する。これまでにこの十坪内では、一九八九年度に本調査地の東隣で事務所新築に伴う試掘調査（奈良市平成元年度―第五次調査）を実施してお

り、その際に掘立柱列や土坑など数多くの遺構を検出している。今回は十坪内の宅地の様相を把握することを主目的として、約八〇〇㎡の調査区を設定し実施した。

調査の結果、縄文時代の土坑一基、弥生時代の自然流路一、奈良時代の掘立柱建物一三棟、掘立柱塀二条、井戸三基の他に、時期不明の自然流路二を検出した。

奈良時代の建物は、規模が小さく、建物の主軸が国土方眼方位の北で東に振れているものが多い。掘立柱塀も北で東に振れる傾向が窺われる。発掘区の南端では、三条条間路が近いためか建物などの遺構は検出できなかった。井戸は、三基とも井戸枠は既に抜き取られており残存しない。このうち、一基の井戸の抜取り穴からは今回報告する木簡をはじめ、奈良時代中頃の土師器・須恵器、瓦片、種子、斎串、箸が遺物整理用コンテナで計六箱分が出土した。

弥生時代の自然流路は、一部を検出しただけで、西端と北端は発掘区外へ続くため全長は不明である。深さは、検出面から〇・二～〇・六mを測る。流路内の堆積土には、弥生土器片、サヌカイトが含まれていた。サヌカイトは小さな剥片が多く認められたため、自然流路の堆積土ごと採取した。現在、土壌を洗浄しながらサヌカイト片を選別している。

縄文時代の土坑は、弥生時代の自然流路の下層で検出した。東西径一・一m、南北径一・三mの平面楕円形の掘形で、深さは〇・三mである。埋土からは、縄文土器破片、石器（叩石、台石）が出土した。奈良市内では縄文時代の遺構が検出された例は少ないが、本調査地から北東七〇〇mの菅原町付近に位置する菅原東遺跡では、縄文時代後期～晩期の石器や自然流路が検出されている。こうしたことから、本調査地周辺に縄文時代の集落がある可能性も十分に想定されるため、今後は、奈良時代の下層をも含めた綿密な調査が必要であると考えられる。

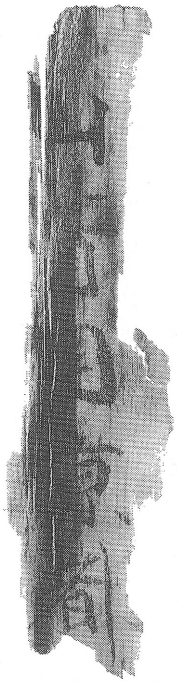
8　木簡の釈文・内容

一　右京二条三坊七坪（第三七八―四次調査）

(1)　「山背国京都」　001

木簡の上端から刃物を入れて削ぎ取った削屑で、上端は木簡の原形をとどめている。この削屑と同材と思われる削屑の小片三点が同じSE五一六の井戸枠内から出土したが、いずれも墨痕が認められず接合もしなかった。

「京都」は、都を指す一般名詞と考えられ、「京師」ほど頻度は



一(1)

高くないが『続日本紀』にも七例用例がある。このうち天平一二、一三年の記事に恭仁京を指す例が三例まとまっているのが注意されるが、今回の木簡の「山背国京都」は、共伴遺物の年代からみて長岡京を指す可能性がある。

二　右京三条四坊十坪（第三八六次調査）

(1)　□其□〔寒カ〕縻□　(130)×31×4　081

文字は全体に左寄りに書かれている。「縻」は麻と糸がかなりずれているが一文字とみられる。全体の文意は不明であるが、縻は麻糸を意味するものかと考えられる。

なお、両調査出土の木簡の釈読・解釈については、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々のご教示を得た。

9　関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書（第一分冊）平成九年度』（一九九八年）

（一　原田香織、二　三好美穂・松浦五輪美）

二(1)